

平成28年度知事と県民の意見交換会概要

テーマ：地域おこし協力隊と考える実効性のある移住・定住対策

日時：平成28年8月29日（月） 15：30～17：30

場所：五城目町地域活性化支援センター

※意見交換会に先立ち、シェアビレッジ町村を視察。

(知事あいさつ)

本日は、台風が近づく大変な時期に集まっていたいただいて感謝する。知事は情報は何でも入るが、それは間接情報であり、実際の現場にいる人の情報は入らないものである。そのため、地域ごとに産業振興、農業振興、福祉、子育てなど、テーマを決めて、ダイレクトに手がけている人のお話を聞き、行政として、あるいは市町村と連携して、問題を解決するために、全県を歩いている。今年は、今日この地区が最後であり、知事になって8年続けている。かつては、長がつく人との政治色の強い会議はあったが、こういう具体的な現場の人達との意見交換はなかった。現場の皆さんの声から色んな面で理解出来るものもあるし、そこからヒントを得るもの、県や市町村の政策、事業とのずれがみつかるところなど、この8年間で相当制度の改革、新しい政策、昔の政策を変えるなど役立っている。

今日は、政策のPRの場ではないので、皆さんがどういう活動を行っているのか、将来どういうものを目指すのか、活動中での課題、悩み、行政について要望そういうのも含めてお話を聞き、それをまとめて今後の県政に活かしていこうという試みなので、堅くならずにお話していただきたいと思う。

また、全国でも、秋田は地域おこし協力隊の定着率が非常に低い。ある意味閉鎖的なところ、外とのつきあい方が秋田県特有の下手なところなど、様々な原因があると思う。地域おこし協力隊の定着率が低いのは、それだけでなく色んな所に関連する。地域の人以外の目で地域を見るとどういう事を感じられるかが非常に大切である。色んな問題を解決するブレイクスルー窓口になると思うので、秋田について感じた事を含めて聞きたいと思うのでよろしく願います。

【参加者自己紹介】

(A氏)

生まれは北海道、各地を転々として今年の4月に盛岡市から移住した。服飾の専門学校を卒業後、アパレルや飲食等で働き、昨年、男鹿に遊びに来た時に知り合った知人から声をかけてもらい、男鹿市地域おこし協力隊となった。男鹿は自然豊かで山も海もあり、季節を身近に感じられる場所だと思う。現在の活動内容は、色々な人に会いに行き話を聞かせてもらったり、地元の人達のお手伝いをしている。資料の新聞記事にあるように、「キタノウラオモテ通信」という手書きのマップを先輩移住者の方と作った。今年の6月末にこれを作り、その時期の男鹿の見所を集めたもの。それまでこういうマップは、商工会に入っている人しか載せられないなどしがらみがあった。地域おこし協力隊

だからこそ関係なく自分がいいなと思ったものをお勧め出来ると思って作ってみた。これを見て男鹿に住むと言う事はないだろうが、まずは遊びに来てもらうきっかけになればと思い、市内外に置いてもらっている。実際、これを見て男鹿に遊びに来てくれた人もいたので、これからも私達の目線で男鹿の事を伝えていければと思っている。

#### (B氏)

仙台市出身、秋田大学に進学し卒業後2年は、撮影や家庭教師の仕事をし、その活動の中で行っていた市民活動の流れで男鹿の地域おこし協力隊となった。男鹿という舞台は美術をやる場所としては面白いと思っている。現在の活動は、地域の方とロックフェスティバル、五社堂800年祭等参加している。これからは、船川で廃業した鉄工所を活用して、11月頃地域のギャラリーを開けないかと考えている。

#### (C氏)

まずは五城目町地域おこし協力隊4人が取り組んでいる事を紹介し、その後各自が自己紹介を行うこととする。

地域おこし協力隊は、各市町村によって取り組む活動内容が大きく異なるが、私達は少子高齢化が進む秋田として移住定住、そのための雇用、産業創出、6次産業化について取り組んでいる。人口減少と言って悲観的に捉えられる事が多いが、日本全体の推移として著しく人口が増えた時期を経ての今であり、悲観すべき点でなく、希望ある転換点であると考えている。それでは何が出来るのかを根底のテーマとしながら活動をしている。これは役場に言われた事でなく、私達五城目町地域おこし協力隊が設定した目標だが、今、世界の中で一番人口減少している日本、日本の中で一番人口減少している秋田として着目されているのを逆手にとって、世界一子どもが育つ町が五城目町であると大きなビジョンを持って活動しようと思っている。その活動拠点となるのが、このババメベースである。ここはオープンして2年半だが、ベンチャー企業が11社入居しており、来月、再来月と入居希望は増えている。県庁のドチャベン事業の企業も2社入っており、ドチャベンで入賞は逃したものの、ここで起業すると移住してきた若者もいる。

ここから、自己紹介。秋田市出身、6歳の娘と夫と五城目に移り住んで3年目になる。私は東京で就職後、出産で退職し、出産後のお母さんを支援するドゥーラ協会という団体を設立し、今も理事として関わっている。東京では、地域の中で孤独を抱えて子育てしている母親が多い中、秋田は子育てするには最高の環境でないかと言う思いで秋田に飛び込んだ。その秋田が人口減少で悩んでいるが、子育てするなら秋田だというメッセージを伝えていきたいと言うのが根底にある。五城目町は観光都市でないので、100万人に来てもらうとは言わないが、ご縁が出来た1万人が100回来る様な町づくりとして、役場と一緒に五城目ファンミーティングを首都圏で開いたり、町の魅力を発信したり、県のPR動画でシェアビレッジを紹介したりしている。先週もフランス人が訪問したり、その前はベトナム人が一週間滞在していた。こうした中、20数名の若者、子どもが移住してきたと言うのが現在の状況である。

#### (D氏)

東京都出身、東京大学で公共交通の研究を行い、IT企業で勤務後、友達の縁があり五城目町に移住する事となった。業務のメインは、雇用創出、6次産業化支援。シェアビレッジには立ち上げから関わっていた。また、仲間と一緒にキイチゴの栽培を行って

おり、五城目町は、キイチゴの生産日本一であるが、それをもう一步進めたいと考えている。この仕事を通じて、大切だと思えるのは、続いていく地域は次世代を育てているという事。子ども達に農業の魅力を伝えたいという農業法人があり、私はウェブサイトや米袋のデザインに関わったが、ここには今年30代、40代の女性2人が新たに就農して、農業を学んでいる。

それから、五城目を世界で一番子どもが育つ町にしたいという点で、五城目小学校では、AIU（国際教養大学）から毎週3カ国の人に来てもらい、5週間連続、計15カ国の人達と6年生が交流を行った。五城目小学校6年生は、世界で一番外国人と触れた日本人ではないかと思う。また、五城目高校では、私の母校の東京大学と連携し、町の研究をする事を通して次世代リーダーを育てている。先々週は、世界中の、主にベトナムからの学生と日本の大学生が、ここで高齢化社会についての研究を行い、グローバルなリーダーシップを育むという事を行った。五城目を研究の地としても魅力あるものとして世界に発信したいと考えている。

#### （E氏）

2年半前に秋田に移住。五城目に来る前は、市民が社会の課題を皆で共有しながら、そこからイノベーションを起こしていく様な仕組みに興味を持ち、キャリアを積んできた。インターネット放送局でビデオカメラマンをやったり、ニュースを配信した事もあったし、多文化共生をテーマとしたミュージアムで企画広報をしたり、大学院ではメディアリテラシーを研究してきた。五城目町での活動は、520年続く朝市、山菜や地元の野菜を販売している地産地消の象徴、ここを小商い、スモールビジネスの場に出るのでないかと考え、町の皆さんと一緒に取り組んできた。朝市の開催日の中でも日曜日と重なる日が年14回あるが、それを「朝市プラス」として、伝統と新しいチャレンジが共生する場所になるよう企画した。また、町民と共に「五城目朝市わくわく盛り上げ隊」を立ち上げ、フェイスブックで朝市の情報発信を行ってきた。それまで、朝市には大勢お客様が来る事はなかったが、今「朝市プラス」の日には、平均3,300人のお客様がいらして、お店も70店舗登録されている。多くの方が来られる様になっただけでなく、既存店の売り上げも増えて笑顔が増えた事と、朝市に子どもが訪れる様になった事が良かったと思っている。子ども達が朝市を楽しむ事は、子ども達に朝市の記憶が残っていく事であり、そこが大事だと思っている。老若男女様々な方の交流の場になっていると共に、町の人達の小商いの可能性の芽が出てきていると感じている。地域活性化支援センターの事業として、女性のスモールビジネスの応援のための講座を、去年と今年開催したが、その受講生が朝市に出してみようという動きがあり事業の両輪になっている。それ以外では、「五城目朝市大学」という町づくり大学を立ち上げ、その中から市民活動が生まれてきている。また、明治大学とのコラボレーションにも関わったり、町の子供達に、前向きに町づくりをしている人や事業者さんと出会う場所を作る事を行っている。

#### （F氏）

空き家の利活用の担当として、昨年7月から協力隊に着任した。去年まで、ベネッセアートサイト直島に勤務し、瀬戸内海の景色を見て、離島の地域の良さや暮らしの美しさを掘り起こしていく事を企業として行っていた。ここには安藤忠雄さんの建築物などもあり、人口3千人の島に年間10万人以上の観光客が訪れている。香川県主催の瀬

戸内国際芸術祭では、直島が本拠地として期間中30万人の来客があった。直島では、空き家を活用してアーティストの作品を展示しており、その事業に関わっていたことから、五城目町の空き家の利活用を担当する事となった。まずは、7月から半年かけて、五城目町の空き家の現状を調査した。町では平成24年に所有者にアンケート調査を行ったが、その後どうなっているか目で見て確認し、当初400軒弱と言われていたが、300軒弱に落ち着くのではないかと考えている。これをどう利活用するか、具体的には町外から移住する人に提供する事からスタートしているが、なかなかすぐに住める状態の家は少なく、基本的に改修が必要となる。自分自身、実家は五城目だが、役場近くの空き家を4月下旬にギャラリーとしてオープンし、8月には美術展も行った。五城目高校と大学の研究員の先生と取り組んだワークショップの成果を、ここで紹介するという事を行っている。つまり、町の人達が頑張っている姿を見せるギャラリーでもあると定義してやっている。また、町外からの移住希望者のサポートを行い、昨年度は20名程度が五城目町に移住する事が確定となった。今後は、どう空き家を活用すべきかを考えながら事業に取り組んでいきたいと考えている。空き家がたくさんあるのがもったいないから、絶対使わなきゃいけないのか、そこからもう一度考える時期かと思っている。大阪から移住した家族に対しては、移住を決める前にアパートで暮らして自分達の本拠となる所を見極めようと相談を受け続け、その後移住につながった。これからは定住サポートに取り組まなくてはならないと思っている。あと今年度は、空き家の情報が載った、五城目町の暮らしをイメージ出来るマップの作成に取り組みたいと思っている。

#### (G氏)

山形県米沢市出身。大学卒業した年の12月に五城目に来た。その理由は、大学も山形県内だったので、県外に出てみたいという思いと、集落支援員の仕事に興味を持ったからである。現在、町内全71町内会の活動をサポートしている。活動の一つは元気な地域づくり支援事業として、平成26年から28年の間に71町内会全てが補助金を活用出来る事業。ワークショップ開催の準備や申請書作成等書類の書き方の支援も行っている。実際に事業に参加して手伝っているが、世帯数が3世帯しかない町内会や、高齢化率が70%を超えている町内会もあり、そういう所を意識して支援するようにしている。30年ぶりに旅行に行った町内会や、これまで年一回の総会しか顔を合わせる機会がなかった町内会が活動するきっかけを作る事が出来たと思っている。活動の二つ目は、地域包括支援センターの方と一緒に活動する事。介護予防教室の水中運動教室を、自分も一緒にプールに入って支援したり、認知症予防やサロンと一緒に参加して支援したり、その様子をフェイスブックで情報発信する活動をしている。今後は、これまでの活動の様子をまとめた冊子を作りたいと考えている。また、地域包括の方と高齢者に関わってきた事から、自分の中で地域包括の支援に興味を持つ様に変化があったと感じている。

#### (H氏)

東京都出身、前職は新聞社に勤務していた。記者ではないが、あらゆる情報が入ってくる環境にあり、考える癖がついた事が大きなものだと思っている。地方創生が叫ばれる中で様々な活動がある事を知り、その中の一つが地域おこし協力隊だった。これは素晴らしいプロジェクトだと思い、自分も活動したいと思った。活動場所にこだわりはないが、やるからには東京とは違う環境で活動したい、自分を試したいと思っていた。募集自治体を探していると、現地面接では交通費がネックとなる中、大潟村と能代市が東

京で面接を実施していると知り応募した。これが秋田を選んだ理由である。面接では村長直々に説明と面接を行い、その本気度を感じると共に、知的で柔軟な高橋村長に惚れ込み、大潟村を選ぶ事となった。

昨年6月に大潟村に着任し、産直センター潟の店の担当となり、現在もそこに勤務している。完全に潟の店の勤務のみで、自分と役場とのつながり、話し合いは一切なく、お店の一従業員である。通常の店内業務の他、ホームページ運営管理やイベントの企画、インターネット販売等、1年目に比べると任せてもらえる仕事が増え、やりがいを感じている。最近では他店との差別化、新規事業の開拓と日々暗中模索している。潟の店の売り上げは昨年度4億4,900万円と県内1位となった。リニューアル1周年で話題性に事欠かず、メディアにうまくアプローチしたのも大きいと思う。地場産野菜にも力を入れ、年間通して切らす事なく、豊富な品揃えでロープライスハイクオリティをお客さんにアピール出来たのも大きかったと考えている。それは、新しい事に果敢に挑戦していくアグレッシブな大潟村の農家がいたからこそ実現出来たもの。しかし、これは私がいよいよがimaiが達成していたと思う。昨年度経験した事を今年どう活かすか。また、今年度潟の店県内1位の防衛に自分がいかに貢献出来るかを考えている。

昨年度は、大潟村地域おこし協力隊として自分の活動定義が確立しておらず、ふらふらしていた気がする。その時は地域おこし協力隊を漠然と広義なものとして捉えてたので、毎日潟の店に勤務するだけの自分に疑問を抱く日々だった。自分が思う地域おこし協力隊と違う、日々理想と現実との葛藤だった。しかし、今年度に入り、こうあるべきと一律の活動定義がないのが地域おこし協力隊と答を導き出した。潟の店の担当になったのなら、そこで全力で尽くし、潟の店の売り上げに貢献する事が結果的に大潟村に貢献する事だと思える様になった。小売業は数字で結果を出し、協力隊の存在意義を示すしかない。今は潟の店が原動力であり、活動の全てだと思っている。

活動自体は充実しているが、大潟村での生活に満足しているかは別問題である。人口が少なく住家が密集している分、自分の存在意義をきちんと示さない限り、定住はかなり難しい地域だと思っている。

#### (I氏)

大潟村では9月8日から11日まで水上スキー世界学生選手権大会が行われる事になっており、主にその運営に携わっている。元々スポーツ振興担当として大潟村に着任しているが、特に何かを企画しているのではなく、どうしたら村民の方に信頼してもらえるかを見ながら、地域のスポーツイベントに参加する等ゆっくりと活動している所である。

#### (司会)

皆さんが活動や日常生活を通じて感じた、秋田のいい所や課題、ここをもっとこうしたらいいのではないかという点について、幅広い観点からお話してほしい。

#### (A氏)

いい所は自然を近くに感じられ、旬のものが身近に感じられる所。男鹿は足をひっぱる文化があり、新しい事を始めるのは大変だと人に言われている。協力隊が終わった後、どうしたら男鹿に残れるかと考えている。男鹿がいいと思って移住してきたので、男鹿のいい所を見つけていきたい。今は北浦の空き家に住んでいるが、県のリフォーム補助金を使い改修する予定。隣近所も空き家が多いので静かである。

(B氏)

いい所は1時間で山も海も景色が楽しめる所。ただ、アクセス面は悪い。冬場は車がないと生活が大変。また、地区ごとの繋がりを作るのが大変だが、違う町内会の人同士でも、青年会の繋がり、子ども同士の繋がり等から新たな繋がりを作っていきたい。また、町内会長の連携が必要と思っている。住まいは船川の海洋高校の近く。空き家バンクの中から選んで住んでいる。

(C氏)

秋田は子育てするのに最高の環境。私が思うだけでなく、シェアビレッジに泊まりに来たお客さんが皆「ここはいい」と言っている。でも、実際の移住には一步が踏み出しにくい状況。ポンとやってきて起業等する行動力ある人は既に来ているが、本当は帰りたいが出来ない、たくさんの方が実際に帰ってくるというのがこれからの課題だと思っている。学力、体力日本一を達成した秋田だからこそ、世界一子どもが育つ秋田へと次のステージへ向かってほしい。「人間力養成ラボ＝秋田」「子育てするなら秋田」そのポテンシャルはあるので、全体でイメージングしてほしい。ただ、課題として、Hさんの意見のとおり、県外の方が、集落にポンと1人で入るのが難しい閉鎖性はある。先週末に、子育てを考えるイベントを行ったが、その講師が「米どころは閉鎖的な県民性であるのが当然である」と言っていた。私達は協力隊4人が一緒に活動し、起業に向けて、ここを拠点に一斉に外に開かれた空気が生まれたから、出来たと思う。そうでない所に1人、2人で集落に入って行き、協力隊が定着するのは相当に厳しいと思う。それを一斉にやる様なエリアでよそ者を獲得する等、やり方を工夫する必要があると思う。

(知事)

確かにここは例外的だ。ババメベースは集落というよりリゾートマンション、ホテルの様だ。視覚からくるオープン性あり、恵まれていると思う。

(D氏)

私達は初めの3ヶ月任務なしだった。誰も知り合いがない中、町長からは、五城目を好きになってほしいから、まずは暮らしを安定させ、出来るだけ楽しんでください。と寛大な気持ちで受け入れてもらっていた。最初の3ヶ月は、町の課長や係長に、町中の案内や、繋がるべき人を紹介してもらい、会う人が皆いい人ばかりだったので、秋田のネガティブなイメージはない。今回話したかったのは、一つに協力隊の制度をどう評価するかという事。町にとってプラスなのは当然だが、制度上3年で切れるのは確か。3年間ここにいた協力隊にとってもいいものだったかを見るべきだと思う。私達は、目標の「移住定住促進」は与えられていたが、やり方は任せると、月1回の打合せや日々の報告の他は自由にやらせてもらっていた。おかげである程度成果は出せたと思っている。二つ目は、秋田で子育てしたいという人を増やす事。子育て世代の移住のネックは田舎でもいい教育を受けられるかどうか。五城目は「人間力工房」みたいなものを作って移住を増やしていきたい。

(E氏)

五城目町地域おこし協力隊は入った角度、入り方が良かった。この環境は特別に恵

まれているので、秋田全体と言うより、自分が見えている所の魅力だが、自然があつて、子育て環境が良く、移住者が増えてきて、その中から起業が多くなるとかけ算でアイデアが生まれてきている所がいいと思う。朝市でも、大阪から移住した方がクリエイティブキッズマーケットという、子ども達自身が朝市で起業を起こすという取組を行ったり、色んな教育コンテンツが増えている。私は未婚だが、ここで出産して子育てしたい、任期終わっても住み続けたいと思っている。もうあくせくした東京には住めない。今の時代は、起業するにしても農山村の方が可能性や余白がある。自分がそこで本領発揮できるかと言えば、東京は競争も厳しいので難しいが、ここであれば起業しやすい。これからは無形民族文化財を表現するファッション等を考えている。協力隊の活動をして感じた事は、移住者であれ、ずっと地域にいた方であれ、一人一人が自分の力を発揮し、開花出来る様なる応援部隊があればいいと思っている。相談する相手がいて、やりたい事を進められる環境があるのが大事だと思う。私もそういう人達を支援していくのが仕事だと思っている。協力隊が終わった後は、自分の可能性をきちんと発揮していくのが秋田の魅力を発信していくのだと思う。また、遊学舎事業に関わって感じたのは、秋田は頑張っている大学生がいるのが印象的だが、彼らは、相談相手、メンターがいない、自分を育ててくれる環境がほしいと言っている。秋田にインターンシップや若者を応援するイベントを開こうと準備しているが、そこはもっと取り組む可能性があると思っている。

(F氏)

地元の五城目に帰り、勝手知ったる五城目だが、外からの視線が入った事で地元の見え方が変わった。旬、山菜、季節のお祭も味わい深いと思う様になったし、地元で頑張っている人に目が行く様になった。高校を出て関東の大学に行ったが、秋田で行きたい企業、将来がないと視野に入らなかつたが、今は新たな発見がある。一面では、町と在など縄張り意識が多少なりとも五城目にはある。そういった事が足かせとなって、若者は外に行く。縄張り意識をどう解消するのか。外から来ている新しい関係性で作っていくのは貴重だと思う。

(G氏)

私は山形出身で、同じ東北だからあまり変わりはないかと思つたら全然違つた。町内会ごとに伝統行事あり続けているのが凄いと思う。秋田のいい所である自然を秋田の人は当たり前だと思っている。集落支援員として地域に入ると、私に「何やってくれるの?」と尋ねられる。人任せになっている印象がある。

(H氏)

大潟村は新しい事にチャレンジするプロ意識あるアグレッシブな農家がたくさんいる。ただ、結束力が強い分排他的であつたり、プロ意識強い分人の意見を聞かない所はある。

(I氏)

大潟村は静かでゆっくり出来るのがいい所。仙台は暴走族がうるさかつた。四季の美しい風景も素晴らしいと思う。

(司会)

今日のテーマである移住定住の促進に向けた具体的な提案や意見を伺いたい。

(A氏)

移住定住に向けて、なかなかそこまでたどり着いてないが、今年度中に定住体験ツアーを実施する予定なので、それに参加してもらい男鹿の魅力を伝えられればと思っている。

(B氏)

移住の前に、これをやりたいから入ってみようというきっかけをどこに作るか。外から来た人も制作をするために鉄工所を使った場を作っている。

(C氏)

目先の移住定住より20年後の政策だと思う。例えば、東京大学大学院やAIUと共に取り組んできたが、ここに入居して、少子高齢化を研究するエイジラボを作りたいと東京大学の先生が言っていた。試験的な取組として数ヶ月五城目高校と東京大学で実施した。秋田は何もないから出て行くと言った高校生が、今まで与えられたものを覚えるだけが勉強だと思っていたのに、自分から学ぶ姿勢、秋田の未来を考えるという感想を述べる等どんどん変わっていった。資金繰りが課題だが、こうしたエイジラボを五城目高校、矢島高校、六郷高校、その地域にとっては大切だが、存続が危ぶまれる学校を拠点として実施したいと考えている。高校生達を秋田に残す様な未来づくりを行うのは20年後の未来に向けて重要な本当の移住定住対策だと思う。海外との連携については、秋田は語学に力を入れてるのはわかるが、ALTだけでペラペラにはならない。グローバル教育によって秋田に戻ってくるサケの様な語学教育プログラム、グローバルローカルな教育をやりたいと思っている。

(D氏)

海士町は人口2千人だが、ここで学べるものがあるからと世界中から子どもが集まっている。こういう事が秋田でも起こっている。五城目高校、矢島高校、六郷高校、その地域だから出来る教育がある。秋田で違和感を持ったのは卒業した高校で人を判断する事であり、それは寂しい事だと思う。五城目高校出身だから地域を変えていくんだという思いの子どもを地域としてサポートしていきたい。五城目高校生を海外に行かせようという気持ちで次世代への投資をしたい。秋田でもチャレンジしたい大学生がいるが、大学の4年間は良かったと思える様に、地域の素晴らしい人達との交流も深めたいと思う。ただ、秋田は移動手段がないとそれが厳しい。昨年、神戸大学の学生を3ヶ月間我が家に住まわせて、地域の人達と交流し、多くの事を学んでいった。彼は一般企業に就職したが、これまでは企業で働かせられると思っていたが、今度は企業を使って日本の教育を変えてみせると言っていた。それは町の人の魅力が彼をそうさせたのだと思う。だからこそ次世代への投資としての教育は必要である。世界で一番高齢化している所の知見を世界中の学生と研究する事によって、秋田を世界に発信したい。

(E氏)

移住定住対策というとはどうやって人を呼び込むかなので、ドチャベンが必要だと思う。何年か活動して思うのは、今ここにいる女性や若者が本領発揮し、楽しそうに活動し、

開花していると、それは絶対に発信されて、外に伝わる。その結果、あそこでは何か出来そうだと人が集まると思う。五城目高校との活動を通じて、私も高校生や若者への投資は大切だと感じる。高校生と話して、秋田はどうなるかと聞いたら「消滅するんじゃないの」言われてショックだった。それはメディアで聞いてそういうものなのだとフラットな気持ちで受けとめている。近くで、五城目で色々動きがあるのに、高校生には伝わっていない。高校生の情報の受け取り口は違い、ここで起きている事が何も知らない。それを知らせるために私達は高校と共に活動を続けている。

(F氏)

空き家の利活用を担当しているが、町の空き家の中に文化財がある。調べてみると町には百何件の文化財があった。また、71ある町内会には、それぞれに祭があるが、今それが失われようとしている。将来に向かって地域を維持していく時に、文化が継承される事は考えるべきだと思う。具体的には伝統芸能アーカイブ、文化財バンク等、考えているが、県内の価値あるものをネットワークする必要があるのではと思っている。

(G氏)

自分が移住するなら、町の人を楽しそうにしている所だと思う。五城目は朝市が盛り上がっていたり、高校生を巻き込んで色々な事をやっているのを見て、地域の人達がこの町いいな、外の人もこういう町に住みたいなど感じると思う。そういう意味でもこうした活動が広がればいいと思う。

(H氏)

私は職場にずっといて自由な時間がなかった。それでも自分を売り込んでいかななくてはならないので、休日返上で色んな所に入っていったが、それはとてもしんどかった。最初の1、2ヶ月は自由にして、その自治体を好きになってもらう事が必要だと思う。

(I氏)

私も村を好きになるための時間を取りづらいつ感じている。

(知事)

色々なお話を聞かせていただいた。皆さん元気で、地域になじもう、地域の特色をつかみつつ苦労しながら、問題意識を持ってその地で暮らしているのがよくわかった。移住定住は、田舎の人口が減るから外から人を呼ぼうというケチくさい発想ではない。日本は農耕民族なので、その地で暮らすしかなかったが、農業が近代化すれば人口が減るのは当然である。だからと言ってそれに変わる人口を吸収する都市部、多くの人を使った産業社会はいつまで続くのか。30年後になくなる職業はホワイトカラー、工場労働者である。これまで農村部で考えていたのは企業誘致、工場誘致だった。これからの新しい産業社会は多人数で同じ作業するのはいずれなくなる。個人個人の能力、人間力が基盤になってそこから新しいビジネスの種が出てくる。組織に使われるのではなく、時代が違う時にどう生きていくのか。協力隊は、将来の脱産業社会のために個人としてどう生きるかの壮大な実験でもあり、先兵でもあると思う。教育を取っても画一的な教育プラス個人個人の能力を活かし方をどうするかが必要。そして、スポーツビジネス等、これまでビジネスと考えられないのが飯の種になっている。人口を増やすために、地域お

こし協力隊を活用する、移住、定住をやるという発想ではなく、21世紀後半をどういう風にしていくか、ピントを絞れば、地域が消滅する事に関係ない。増田レポートに過剰反応している。人口をどこの地域も増やすのは難しい。もう一度その地域を見て地域に何が出来るのか、地域に自分の能力をどう植え込むのか、が必要。そういう意味でよそから見る目が大切。皆さんは自分が生まれた所でない所から来て、今の地域をよく見ている。私もそれに元気づけられた。いつも言っている事だが、今は「人間力」が弱くなっている。個人個人の能力、生きる知恵、不況になった時の身の処し方、抵抗力等がなくなっている。それには、精神的、肉体的な能力、体中の細胞が常に活性化する自分を表現するそういう人間力が必要。これは教育の問題だが、教育だけではなんともならない。人間力を個人個人つける事が地域や将来の日本が持続する道だと思う。今日は皆さんから色々な事を教えてもらって大変参考になった。持ち帰って色々何が出来るか我々も真剣に考えていく。どうか皆さん、今住んでいる所を好きになってください。ありがとうございました。

(終了)